法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-13

ハイブリッド型ペナルティ法による進行型破 壊の解析

武田, 洋 / TAKEDA, Hiroshi / TAKEUCHI, Norio / OHKI, Hirohisa / 竹内, 則雄 / KUSABUKA, Morito / 大木, 裕久 / 草深, 守人

(出版者 / Publisher) 法政大学計算科学研究センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title) 法政大学計算科学研究センター研究報告 / Bulletin of Computational Science Research Center, Hosei University

(巻 / Volume)
14
(開始ページ / Start Page)
153
(終了ページ / End Page)
158
(発行年 / Year)
2001-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00024932

ハイブリッド型ペナルティ法による進行型破壊の解析

大木 裕久 法政大学大学院工学研究科

竹内 則雄 草深 守人 法政大学工学部土木工学科

武田 洋 法政大学工学部システム制御工学科

本論文では進行型破壊の解析法を開発することを目的に、ハイブリッド型仮想仕事の原理を基礎とする,引張破壊を考慮した材料非線形解析法について述べる.この方法では,Lagrangeの未定乗数にRBSM のばねぼ概念を導入し、このばねをペナルティと考えることで、近似的に部分領域境界面上の変位の 連続性を導入する.初めに、本手法の定式化を示し、続いて、簡単な例により、本手法によって得られる解の特性について検討する.

1. はじめに

進行型破壊の解析では、2重節点の処理などが不要な 境界面上の物理量を取り扱った方が、簡便なアルゴリズ ムになる.FEMによる要素境界面の物理量を取り扱う方 法として、ハイブリッド型の変分原理がある¹⁾.この方 法では、変位の連続性を若干緩め、付帯条件をLagrange の未定乗数によって変分表示に導入している.この未定 乗数は要素境界面上の表面力という物理的な意味を有 しており、変位場は適合条件に束縛されることなく要素 毎に独立に仮定することができる²⁾.

本論文では、このハイブリッド型変位モデルの考え方 に着目して、Lagrangeの未定乗数にばねの考え方を導入 し、ばね定数としてペナルティを用いる新しい解析法を 展開する.本論文では、以降、この方法をハイブリッド 型ペナルティ法(HPM:Hybrid-type Penalty Method)と呼 ぶ.HPMでは、解析領域を小さな部分領域に分割し、部 分領域毎に独立な変位場を仮定して境界上での変位の 連続性をペナルティにより近似的に導入する.このとき、 部分領域間の境界において、表面力が求められる.この 表面力を利用して、RBSMと同様なすべりや引張破壊な どの進行型破壊を導入すれば、2重節点による自由度の 増加を伴わずに解析を進めることが可能である.

はじめに、剛体変位と部分領域内で一定のひずみによ る線形変位場を用いて定式化を行う.このような変位場 を用いると、高次項を加えることで変位関数の次数を上 げることができる.さらに、進行型破壊に対する非線形 解析法を展開し、本手法によって得られる崩壊荷重の精 度や破壊の進展について検討を加える.

2. 基礎方程式とハイブリッド型仮想仕事の原理

弾性問題の基礎方程式は次式で与えられる.

(釣り合い方程式)	$L^t\sigma+\overline{f}=0$	$in\Omega$	(1)	
(応力-ひずみ関係)	$\sigma{=}Darepsilon$	$in\Omega$	(2)	
(ひずみ-変位関係)	arepsilon = L u	in Ω	(3)	

ここで、 u, e, σ は、それぞれ、変位、ひずみ、応力ベク トルであり、Dは構成行列、 \overline{f} は物体力を表している. また、Lは微分作用素であり、 Ω は境界 $\Gamma = \Gamma_u \cup \Gamma_\sigma$ で囲 まれた領域、もしくは体積である.ただし、 Γ_u は変位が 与えられる境界、 Γ_σ は表面力が与えられる境界で、以下 の条件を満たしている.

(力学的境界条件)	$T = \overline{T}$	on	Γ_{σ}	(4)
(幾何学的境界条件)	$u = \bar{u}$	on	Γ_{u}	(5)

ここで、T は単位面積あたりの表面力で、T=noであり、 nは境界上の外向き法線ベクトルの成分を並べた行列で ある.また、上付の一は既知量を表している.

式(1)に幾何学的境界条件を満たす仮想変位 δu を乗じ て領域 Ω について積分し、ガウスの発散定理を用いると、 次のような領域 Ω に関する仮想仕事式が得られる.

$$\int_{\Omega} [L\delta u]^{t} \sigma d\Omega - \int_{\Omega} \delta u^{t} \overline{f} d\Omega - \int_{\Gamma_{\sigma}} \delta u^{t} \overline{T} d\Gamma = 0 \qquad (6)$$

ただし、 Γ_u 上で、 $\delta u = 0$ である.

いま,図1に示すように、領域 Ω は閉境界 $\Gamma^{(e)}$ で囲まれたM個の部分領域 $\Omega^{(e)}$ から構成されているものとする.



図1 部分領域Ω^(e)とその境界_Γ^(e)

このとき,式(6)の仮想仕事式は各部分領域の和として 以下のように表すことができる.

$$\sum_{e=1}^{M} \left(\int_{\Omega^{(e)}} [L\delta u]^{t} \sigma d\Omega - \int_{\Omega^{(e)}} \delta u^{t} \overline{f} d\Omega \right) - \int_{\Gamma_{\sigma}} \delta u^{t} \overline{T} d\Gamma = 0$$
(7)

いま,図2に示すように,隣接する2つの部分領域 $\Omega^{(a)}$ と $\Omega^{(b)}$ の共通の境界を $\Gamma_{<ab>}$ とする.



図2 部分領域 $\Omega^{(a)}$ と $\Omega^{(b)}$ の共通の境界 $\Gamma_{\langle ab \rangle}$

この境界において付帯条件

$$u_{\langle ab \rangle}^{(a)} = u_{\langle ab \rangle}^{(b)}$$
 on $\Gamma_{\langle ab \rangle}$ (8)

をLagrangeの未定乗数入を用いて,

$$H_{ab} = \delta \int_{\Gamma_{\langle ab\rangle}} \lambda^t (u^{(a)}_{\langle ab\rangle} - u^{(b)}_{\langle ab\rangle}) \, d\Gamma \tag{9}$$

と表し,仮想仕事式(7)に導入する.ただし, u^(a) びにu^(b)_{<ab>}は,それぞれ,部分領域Ω^(a)とΩ^(b)における境 界Γ_{<ab>}上の変位を表している.

いま,隣接する2つの要素境界面の数をNとすると, ハイブリッド型の仮想仕事式は次のように表すことが できる.

$$\sum_{e=1}^{M} \left(\int_{\Omega^{(e)}} [L\delta u]^{t} \sigma d\Omega - \int_{\Omega^{(e)}} \delta u^{t} \overline{f} d\Omega - \int_{\Gamma_{\sigma}} \delta u^{t} \overline{T} d\Gamma \right)$$

$$- \sum_{s=1}^{N} \left(\delta \int_{\Gamma_{~~}} \lambda^{t} (u^{(s_{a})}_{~~} - u^{(s_{b})}_{~~}) d\Gamma \right) = 0~~~~~~$$

$$(10)$$

ただし、上付きの(s_a), (s_b) は境界 $\Gamma_{<s>}$ に隣接する二つ の部分領域 $\Omega^{(s_a)} \geq \Omega^{(s_b)}$ に関する量を示しており、したが って、 $u_{<s>}^{(s_a)}$ ならびに $u_{<s>}^{(s_b)}$ は、境界 $\Gamma_{<s>}$ に接する部分領 域 $\Omega^{(s_a)} \geq \Omega^{(s_b)}$ の境界 $\Gamma_{<s>}$ 上の変位を意味する.また、左 辺第3項は文献(2)の書き方にしたがい、便宜上、領域 の和の())内に入れておく.

なお、Lagrangeの未定乗数 λ は、次式のように、 $\Gamma_{\langle ab \rangle}$ 上の表面力を意味している²⁾.

$$\lambda = T^{(a)}(u^{(a)}_{\langle ab \rangle}) = -T^{(b)}(u^{(b)}_{\langle ab \rangle})$$
(11)

ここで、 $T^{(a)} \geq T^{(b)}$ は、それぞれ、部分領域 $\Omega^{(a)} \geq \Omega^{(b)}$ における境界 $\Gamma_{<ab>}$ 上の表面力を表している.

3. 変位場とペナルティ

本論文では、部分領域 $\Omega^{(e)}$ 内のある1点 $P = (x_P, y_P)$ における剛体変位および剛体回転 $d^{(e)}$ に加え、直接、部 分領域内で一定なひずみ $\varepsilon^{(e)}$ を用いて、以下のように線 形変位場 $u^{(e)}$ を仮定する.

$$u^{(e)} = N_{d}^{(e)} d^{(e)} + N_{\varepsilon}^{(e)} \varepsilon^{(e)}$$
(12)

ここで、上付きの(e)は部分領域Ω^(e)に関するものである こと意味する.

このように、本論文で用いる変位場は、部分領域内に おける1点の剛体変位と回転に加え、直接、ひずみを自 由度として扱う.また、各部分領域内の1点におけるパ ラメータを用いて部分領域内の変位場を表しているた め、従来の変位型FEMとは異なり、節点において変位を 共有しない.すなわち、本論文における節点は領域形状 を認識するために用いるのであって、従来の変位型FEM のように自由度を設けるための節点ではない.

2章の終わりで述べたように、Lagrangeの未定乗数は、 物理的には表面力を意味している. RBSMでは、表面力 と相対変位の間にばねの概念を導入し、ばねによる表面

力の仕事を用いて全体のエネルギーを評価してる³⁾.

そこで、Lagrangeの未定乗数 λ にこのRBSMの考え方を 適用し、部分領域 $\Omega^{(a)}$ と $\Omega^{(b)}$ における境界 $\Gamma_{<ab>}$ 上の表面 力 $\lambda_{<ab>}$ を次のように表すことにする.

$$\lambda_{\langle ab\rangle} = k \cdot \delta_{\langle ab\rangle} \tag{13}$$

ここで、 $\delta_{<ab>}$ は部分領域境界面 $\Gamma_{<ab>}$ 上の相対変位を 表しており、kはばね定数に対応する係数行列である.

RBSMでは、ばね定数を近似的に1軸状態の応力一ひずみ関係から求めている⁴⁾.これは、要素を剛体と仮定しているため、要素の変形をばね定数に代表させる必要があるためである.しかし、式(10)で示されたハイブリッド型の仮想仕事式には、部分領域内応力、すなわち、内力による仕事が考慮されているため、RBSMのような、要素の変形を考慮するためのばね定数を用いる必要はない.むしろ、近似的に部分領域境界面上で変位の連続性を確保するため、極めて堅いばねを設ける必要がある.そこで、式(13)におけるばね定数を、ペナルティと考え、

$$k = p \tag{14}$$

とする. ここで、 pはペナルティ行列である.

式(13)で用いられている部分領域境界面上の相対変 位は、次のように求められる.

$$\delta_{\langle ab\rangle} = R^{(a)}_{\langle ab\rangle} u^{(a)}_{\langle ab\rangle} + R^{(b)}_{\langle ab\rangle} u^{(b)}_{\langle ab\rangle} = \sum_{l=1}^{z} R^{(l)}_{\langle ab\rangle} u^{(l)}_{\langle ab\rangle}$$
(15)

式(20)において、 $R_{<ab>}^{(a)}$, $R_{<ab>}^{(b)}$ は、部分領域 $\Omega^{(a)}$ と・ $\Omega^{(b)}$ における境界 $\Gamma_{<ab>}$ に対するそれぞれの部分領域境界から見た座標変換行列であり、以下の関係にある.

$$R_{\langle ab\rangle}^{(a)} = -R_{\langle ab\rangle}^{(b)} \tag{16}$$

4. 離散化方程式の誘導

離散化方程式は,式(10)に対して,式(12)で示す線形変 位場の関係を代入することによって得られる.ただし, 仮想変位*δu*は,次のように表されるものとする.

$$\delta u = N_d \delta d + N_\varepsilon \delta \varepsilon \tag{17}$$

離散化方程式の誘導に先立ち,式(12)(17)を次のように整 理する.

$$u^{(e)} = N^{(e)}U^{(e)}$$
, $\delta u^{(e)} = N^{(e)}\delta U^{(e)}$ (18)

ここで、それぞれの係数は以下のとおりである.

$$egin{aligned} & U^{(e)} = \lfloor d^{(e)}, arepsilon^{(e)}
floor^t, \ \delta U^{(e)} = \lfloor \delta d^{(e)}, \delta arepsilon^{(e)}
floor^t, \ & N^{(e)}_{d}
floor^t, N^{(e)}_{arepsilon}
floor^t, \end{aligned}$$

これより、以下の関係が得られる.

$$Lu^{(e)} = LN^{(e)}U^{(e)} = B^{(e)}U^{(e)}$$
(19)

以上の関係と式(2)(3)の関係を用いると,式(10)における左辺第1項は次のように表すことができる.

$$\int_{\Omega^{(e)}} [L\delta u]^t DL u d\Omega$$

$$= (\delta U^{(e)})^t \int_{\Omega^{(e)}} (B^{(e)})^t D^{(e)} B^{(e)} d\Omega U^{(e)}$$
(20)

いま,全部分領域における自由度を並べた1次元配列 をUとすると,部分領域 $\Omega^{(e)}$ に関する自由度 $U^{(e)}$ は,以下 のように関係付けられる.

$$U^{(e)} = \mathcal{A}^{(e)} U \tag{21}$$

ここで、A^(e)は、全部分領域における自由度と着目部分 領域における自由度を関係付ける行列である.同様にし て、仮想変位についても、

$$\delta U^{(e)} = \mathcal{A}^{(e)} \delta U \tag{22}$$

とすると、式(20)は次のように整理することができる.

$$\int_{\Omega^{(e)}} [L\delta u]^t DL u d\Omega = \delta U^t K^{(e)} U$$
(23)

ここで, $K^{(e)}$ は以下のとおりである.

$$K^{(e)} = (\mathcal{A}^{(e)})^t \int_{\Omega^{(e)}} (B^{(e)})^t D^{(e)} B^{(e)} \, d\Omega \, \mathcal{A}^{(e)}$$
(24)

また,式(10)の左辺第2項および第3項は,について も同様に以下のように表すことができる.

$$\int_{\Omega^{(e)}} \delta u^t \overline{f} \, d\Omega + \int_{\Gamma_{\sigma}} \delta u^t \overline{T} \, d\Gamma = \delta U^t P^{(e)} \tag{25}$$

ここで, **P**^(e)は以下の関係にある.

$$P^{(e)} = (\mathcal{A}^{(e)})^t \left(\int_{\Omega^{(e)}} (N^{(e)})^t \overline{f} \, d\Omega + \int_{\Gamma_{\sigma}} (N^{(e)})^t \overline{T} \, d\Gamma \right)$$
(26)

最後に,式(10)の左辺第4項の離散化を行うにあたり, 式(9)で示した付帯条件を部分領域境界面に沿った局所 座標系の成分に変換する.

$$R_{\langle ab \rangle} u^{(a)}_{\langle ab \rangle} = R_{\langle ab \rangle} u^{(b)}_{\langle ab \rangle}$$
 on $\Gamma_{\langle ab \rangle}$ (27)

ここで、R_{<ab>}は全体座標系から局所座標系への座標変 換行列で、式(16)との間に次の関係がある.

$$R_{\langle ab\rangle} = -R^{(a)}_{\langle ab\rangle} = R^{(b)}_{\langle ab\rangle}$$
(28)

このとき、式(9)は次のように書くことができる.

$$H_{ab} = -\sum_{l=1}^{2} \delta \int_{\Gamma_{}} \lambda_{}^{t} R_{}^{(l)} u_{}^{(l)} d\Gamma$$
(29)

式(29)において,式(15)の関係を用い,さらに,式(13)の 関係を代入すると以下のようになる.

$$H_{ab} = -\delta \int_{\Gamma_{\langle ab \rangle}} \delta^t_{\langle ab \rangle} \cdot \mathbf{k} \cdot \delta_{\langle ab \rangle} \, d\Gamma \tag{30}$$

いま,相対変位δ<ab>を次のように表す.

$$\delta_{\langle ab\rangle} = B_{\langle ab\rangle} U_{\langle ab\rangle} \tag{31}$$

ここで、 $B_{\langle ab \rangle}$, $U_{\langle ab \rangle}$ は、以下の通りである.

$$B_{\langle ab \rangle} = [R^{(a)}_{\langle ab \rangle} N^{(a)}, R^{(b)}_{\langle ab \rangle} N^{(b)}]$$
(32)
$$U_{\langle ab \rangle} = [U^{(a)}, U^{(b)}]^{t}$$
(33)

ただし、上付の(a),(b)は、部分領域Ω^(a)とΩ^(b)に関する 量を表している.これらの関係を用いると、式(30)は次 のように表すことができる.

$$H_{ab} = -\delta U^{t}_{\langle ab \rangle} \int_{\Gamma_{\langle ab \rangle}} B^{t}_{\langle ab \rangle} k B_{\langle ab \rangle} d\Gamma U_{\langle ab \rangle}$$
(34)

いま,式(21)と同様に,部分領域境界面 $\Gamma_{<ab>}$ に関する自由度 $U_{<ab>}$ 、ならびに仮想変位 $\delta U_{<ab>}$ は,以下のよう

に関係付けられる.

$$U_{\langle ab \rangle} = \mathcal{M}_{\langle ab \rangle} U \tag{35}$$

$$\delta U_{\langle ab \rangle} = \mathcal{M}_{\langle ab \rangle} \delta U \tag{36}$$

ここで、*M*_{<ab>}は、全部分領域における自由度と着目境 界面に関係する自由度を関係付ける行列である.

これらの関係を用いると,式(34)は次のように書くこ とができる.

$$H_{ab} = -\delta U^t K_{\langle ab \rangle} U \tag{37}$$

ここで、 $K_{\langle ab \rangle}$ は以下のとおりである.

$$K_{\langle ab\rangle} = \mathcal{M}_{\langle ab\rangle}^t \int_{\Gamma_{\langle ab\rangle}} B_{\langle ab\rangle}^t k B_{\langle ab\rangle} d\Gamma \mathcal{M}_{\langle ab\rangle}$$
(38)

以上より,式(13)は以下のように表すことができる.

$$\delta U^t \left(\sum_{e=1}^M K^{(e)} + \sum_{s=1}^N K_{\langle s \rangle} \right) U - \delta U^t \left(\sum_{e=1}^M P^{(e)} \right) = 0$$
(39)

ここで,仮想変位6Uは任意であるため,最終的に以下の 離散化方程式が得られる.

$$KU=P$$
 (40)

ただし, KおよびP は以下のとおりである.

$$K = \sum_{\substack{e=1\\ M}}^{M} K^{(e)} + \sum_{s=1}^{N} K_{\langle s \rangle}$$
(41)

$$P = \sum_{e=1}^{n} P^{(e)}$$
(42)

このように、本モデルの離散化方程式は、式(40)に示 す連立1次方程式に帰着し、左辺の係数行列Kは、各部 分領域の剛性と部分領域境界面に関する付帯条件の関 係を組み合わせることによって得られる.

ここで、付帯条件から求められる係数行列 $K_{<s>}$ の非 積分項に含まれる $B_{<s>}$ は座標の関数となっているため、 部分領域の境界に沿った積分を実行しなければならな い.線形変位場の場合、容易に解析解を求められるが、 本論文では、高次の変位場に対しても対応できるよう、 一般性を考慮し、3積分点による数値積分を利用する. 一方、部分領域境界面上の表面力は、FEMでよく用い られている1積分点で表面力を評価した.

5. 引張破壊を考慮した非線形解析法

本論文では、式(13)に導入したペナルティにすべりや 引張破壊などの条件を考慮して、進行型破壊の解析を行 う.この場合、表面力を取り扱うことになるため、構成 則や非線形解析法の考え方は、RBSMの場合とほとんど 変わらない⁴⁾.

いま,境界面上の降伏関数を次のように表す.

一方, 塑性ポテンシャルOについても同様に

$$f(\boldsymbol{\lambda}) = 0 \tag{43}$$

(44)

ここで,λは表面力である.

$$Q(oldsymbol{\lambda})=0$$

とする.一般的な塑性流れ則は応力とひずみの関係で表 されているが、本論文では、ひずみの代わりに相対変 位δを用いている.そこで、塑性化後の相対変位の増分 [19] (44) - 14] - 11, 2128 Y The Cos 방송(1999년 19 등 17) 1944

 $\Delta \delta^p$ を以下のように考える.

$$\Delta \delta^p = \mu \frac{\partial Q}{\partial \lambda} \tag{45}$$

ここで、Δは増分量であることを、また、上付のpは塑 性状態の量を示している.塑性化する前の量を上付のe で表せば、全相対変位Δδは以下のようになる.

$$\Delta \delta^e = \Delta \delta - \Delta \delta^p \tag{46}$$

一方,塑性化前の表面力と相対変位の関係,式(13)を 改めて以下のように書いておく.

$$\boldsymbol{\lambda} = \boldsymbol{k}^e \cdot \boldsymbol{\delta}^e \tag{47}$$

式(47)は、式(45)(46)の関係を用いて次のように表せる.

$$\Delta \lambda = k^{e} \left(\Delta \delta - \mu \frac{\partial Q}{\partial \lambda} \right) \tag{48}$$

さらに, 塑性条件

$$\frac{\partial f}{\partial \lambda} \Delta \lambda = 0 \tag{49}$$

に代入し,μについて解いた後,式(49)を整理すれば,塑 性化後の増分表面力と増分相対変位の関係が以下のよ うに得られる.

$$\Delta \lambda = \left(k^e - \frac{k^e \frac{\partial f}{\partial \lambda} \frac{\partial Q}{\partial \lambda} k^e}{\frac{\partial f}{\partial \lambda} k^e \frac{\partial Q}{\partial \lambda}} \right) \Delta \delta$$
(50)

上式において, *f*≡*Q*であれば, 関連流れ則に従うこと になる.

一方, 引張破壊については, 引張表面力が許容引張力 を越えた時点で, その境界面が保持していた表面力を解 放し, 以後, ペナルティを0として表面力の伝達が行わ れないようにする. 表面力の解放を, クラック幅に応じ て順次行うこともできるが⁵⁰, 本論文では, 単純に全解 放とした.

FEMの非線形解析法として、荷重増分法におけるrmin 法⁶⁾がある.この方法は、引張破壊などのように、応力 解放の伴う破壊の場合、その解放力によってさらに破壊 が進展し、計算が収束しにくくなるという問題点がある. 本論文では、この方法を応力解放が伴う問題に対しても 適用できるように拡張し、HPMの非線形解析に適用する.

いま,降伏関数をf,現在の表面力を入,増分表面力を △入とするとき,次式を満たすようなrが存在する.

$$f(\lambda + r \cdot \Delta \lambda) \le 0 \tag{51}$$

このrを荷重増分率と呼ぶ.このrを、考えている様々な 破壊条件に基づき、全ての表面力に対して求める.本論 文では、せん断破壊、引張破壊および引張破壊後の再接 触について、この荷重増分率を求める.

このようにして求めた増分率のうち,最小のものを今回の荷重増分率とする.このとき,現在の値と増分後の 値を,それぞれ,nとn+1を付けて表すと,

$$\lambda^{n+1} = \lambda^n + r \cdot \Delta \lambda \tag{52}$$

として増分後の値を求めることができる.変位や要素内 応力についても式(52)と同様にして求める.この結果, 増分後の表面力は,降伏曲面を越えることはなく,降伏 曲面上もしくはその内側に必ずあることになる. 非線形解析にあたり、荷重Pを幾つかの荷重 ΔP に分割する.この荷重 ΔP を作用させ、 r_{min} 法にしたがってi-1 ステップ目までの荷重増分率を求め、その合計を r_{min} と すると、i-1ステップ目までに作用した荷重は、 $r_{min}\Delta P$ と なる.このとき、iステップに載荷すべき未載荷分の荷重 は次のようになる.

 $\Delta P^{(i)} = (1 - r_{\min}) \Delta P \tag{53}$

次に、この荷重 $\Delta P^{(i)}$ を作用させて求めた荷重増分率 を r_i とすれば、(i+1)ステップで作用する荷重 $\Delta P^{(i+1)}$ は次 式によって与えられる.

$$\Delta P^{(i+1)} = (1 - r_i) \Delta P^{(i)}$$
(54)

したがって, 第nステップ目に作用させる荷重は, 初め に与えた荷重をΔ*P*として以下のようになる.

$$\Delta P^{(n)} = \prod_{i=0}^{n-1} (1 - r_i) \Delta P \quad (r_0 = 0)$$
(55)

いま, (k-1)ステップ目で,ある境界に引張破壊が発生 した場合,その境界におけるペナルティの値を0として 力の伝達を遮断し,その境界において所有していた表面 力を解放力 $\Delta F^{(k-1)}$ として,関連部分領域に分配する. *S* 番目の境界における解放力は以下の式によって求める.

$$F_{\langle s \rangle} = -\int_{\Gamma_{\langle s \rangle}} B_{\langle s \rangle} \lambda_{\langle s \rangle} d\Gamma$$
(56)

分配された解放力は、次式のように、次のステップに 作用させる荷重に加え、次のステップにおける増分計算 を行う.

$$\Delta P^{(n)} = \prod_{i=0}^{n-1} (1-r_i) \Delta P + \sum_{k=1}^{n} \left\{ \prod_{i=k}^{n-1} (1-r_i) \Delta F^{(k-1)} \right\}$$
(57)

このようにして、初めに与えた荷重と解放力を全て使い切るまで繰り返し計算を行う.このとき、荷重増分率の合計^rtotalを

$$r_{total} = \sum_{k=1}^{n} \left\{ \prod_{i=0}^{k-1} (1-r_i)r_k \right\}$$
(58)

とし、*rtotal* =1で収束したものと考えることができる. 以上示したように、本アルゴリズムは、解放力を与え ること以外は従来の荷重増分法における*r*mn法と同様な アルゴリズムとなっている.

6. 数值計算例

(1) すべり解析

すべり解析の例として、図3に示すポンチの押し込み 問題の解析を行った.要素分割は図に示すとおりで、極 限荷重を効率よく求めることを主眼として、比較的粗い 要素で分割した.なお、実際の解析では、左右対称性を 考慮し、1/2の領域で行っている.境界条件として、対称 面では、水平方向固定、鉛直方向自由とした.寸法は 2h=0.05m、2b=0.025mであり、このときの解析解による 極限荷重は、 $p_m/2c = 1.22$ である.ここで、 p_m は、載荷 面上の単位面積あたりの極限荷重で、cはせん断強さであ る.材料定数は、弾性係数E=210 GN/m²、ポアソン比, ν =0.3、 せん断強さc=3 MN/m²、内部摩擦角を0とした.ただし、

法政大学計算科学研究センター研究報告

自重は無視している.また,載荷は下部載荷面を鉛直方 向固定とし,上部載荷面に対して変位制御で行った.



図3 ポンチの押し込み問題

図4は,本手法とRBSMによる離散化極限解析の荷重-変位曲線を示した図である.横軸は,載荷板の変位8を 載荷幅で除した値,縦軸は,単位面積あたりの載荷重を せん断強さで除した値である.実線が本手法による結果, 破線がRBSMによる結果で,1点破線は解析解を示して いる.本手法とRBSMの極限荷重は,1.23で同じ値とな っている.ただし,RBSMの要素分割は図3と全く同じ分 割を行っている.しかし,要素のひずみを考慮している 本手法と,要素境界辺のばねに剛性を持たせたRBSMと では,極限荷重に至る変位量は異なっている.



図4 荷重-変位曲線

(2) 引張破壞解析

引張破壊の解析例として図5に示す高さ200mmの無筋 コンクリートばりの曲げ解析を行った.解析に用いた材 料定数は,弾性係数E=27.5Gpa,ポアソン比v=0.2,引張 強度 σ_t =2.9Mpaである.



図6 領域分割

図6は,解析に用いた領域分割で,デロニー三角形を 用いた。

P=30kN(弾性)における,はり下端中央部における変

位は、本手法が、0.0422mm、FEMが0.0424mmで、両者 による解はほぼ同じ値であった.

一方,最大耐力は、本手法が39.8kN,FEMが39.2kNで,約1.5%の相違であった. 図7は本モデルによる破壊直前(P=39.6kN)の変形状況を示した図である.中央部のひび割れが卓越し、クラックの開口が生じている様子が伺える.



図7 破壊時近傍のおける変形状況

7. まとめ

本論文では、進行型破壊の解析を行うため、剛体回転 の影響を考慮したHPMの定式化を展開し、引張破壊を考 慮した非線形解析法を提案した.

はじめに、ポンチの押し込み問題に対する離散化極限 解析を行ったところ、RBSMと同じ極限荷重が得られた. 本論文では、領域内降伏を無視し、領域境界面上でのす べりを考慮しているため、すべり線が同じであれば RBSMと同じ極限荷重が得られる.

次に、無筋コンクリートばりの引張破壊解析を行い FEMによる結果と比較した.その結果、弾性変位および 崩壊荷重は、FEMに近い値が得られた.また、変位モー ド図より引張クラックに伴う開口などの破壊状況や破 壊の進展状況の把握が可能である.

このように、本手法は、FEMの定ひずみ要素の性質と、 RBSMの非線形解析の特徴を兼ね備えた解析法となって いる.このため、FEMと同程度の弾性解の精度を確保し つつ、2重節点などの煩わしいアルゴリズムを用いずに RBSMと同程度の簡便さで進行型破壊の解析が可能であ ると考える.

本論文の解析例は、手法の精度を検証するためのもの であり、今後、3次元問題を含め、様々な問題に適用し て実用性を検証する必要がある.

参考文献

- 1)K.Washizu : Variational Methods in Elasticity and Plasticity, Pergamon, 1975
- 2)鷲津久一郎:弾性学の変分原理概論,日本鋼構造協会編, 培風館,1972
- 3)) T.Kawai : New element models in discrete structural analysis, J. of the Society of Naval Architects of Japan, No.141, pp187-193, 1977
- 4))竹内則雄:地盤力学における離散化極限解析, 培風館, 1991
- 5))上田眞稔,竹内則雄,樋口晴紀,鬼頭宏明,川井忠彦, 引張・圧縮破壊を考慮したRC構造物の離散化極限解析, 土木学会構造工学論文集,Vol.36A,pp315-323,1990
- 6)Y.Yamada, N.Yoshimura and T.Sakurai : Plastic stress-strain matrix and its application for the solution of elastic-plastic problems by finite element method, Int. J. Mechanical Science, Vol.10, pp323-354, 1968

固体力学、材料非線形解析、ハイブリッド型ペナルティ法、引張破壊、せん断破壊

Summary.

An analysis of progressing crack by using hybrid-type penalty method

Hirohisa Ohki

Civil Engineering Major, Division of Engineering, Graduate School, Hosei University

Norio Takeuchi Morito Kusabuka Department of Civil Engineering, Faculty of Engineering, Hosei University

Hiroshi Takeda

Department of System and Control Engineering,, Faculty of Engineering, Hosei University

In this paper, material non-linear analysis considering tensile fracture was developed from the viewpoint of hybrid displacement model. In this model, the concept of the spring of RBSM was introduced in Lagragian multiplier. In addition, compatibility of the displacement on the intersection boundary was approximately introduced using the penalty as a spring constant. As a result of the slip analysis, the slip lines and the collapse load were equal to RBSM. The equivalent tensile collapsing load with FEM was obtained when it carried out analysis of the bending problem for the plain concrete . beam.

Keywords.

Solid mechanics, Material non-linear analysis, Hybrid-type Penalty Method, tensile crack, shear failure

[25] Walioni Surkai and Controls and Linear Astronomy Processing Theory of the Control of States of the Control of States of the States of the Control of States of the States of the

ober – son proto sensor sensor (Caspane - Consensor Casto - t

[1] How an "separation replication of a static stati static stati static sta

AND A CONTRACTOR OF A DESCRIPTION

¹ Sound: A Systematic and C Science. Solar and Sciences and a state of physical device. In the solar of the system physical laboration and solar laborations. In Neuroscience Sciences Sciences Sciences. 19, 2008.